キャラクター名
雛森・霧佳(ひなもり・きりか)

プレイヤー名

シンドローム	エンジェルハィロゥ ハヌマーン	ワークス	高校生	カヴァー	高校生(UGNイリーガル)
オプショナル		年齢	16歳(高校1年生)	性別	女
覚醒	死	衝動	恐怖	初期侵食率	40 %
出自	安定した家庭	経験	喪失	邂逅	師匠：尾花 千暖

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	1	1	0			2
感覚	4	0	0			4
精神	2	0	0			2
社会	1	0	0			1

HP	26
行動値	10
(非装備時)	10
戦闘移動	15
全力移動	30

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃	5		ＲＣ	2		交渉		
回避	1		知覚	1		意志			調達		
運転：			芸術：			知識：			情報：噂話	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：UGN	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
インビジブル・バレット	射撃	5r+5		30		<コンセントレイト：ハヌマーン>+<風鳴の爪>+<見えざる死神>
隠密状態	射撃	6r+5		30		
	射撃	7r+5		30		
	射撃	8r+5		38		

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品	
コネ：情報屋	
コネ：UGN幹部	

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
無疵なる石	P	N		
両親	P 執着	N 隔意		
"霧の情報屋(ミストパペット)"	P 信頼	N 無関心		
雁屋・優佳	P 愛情	N 憎悪		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 2	残り財産P： 0

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：コスト分のHPで復活								
コンセ：ハヌマーン	2	2	メジャー	-	-	-	-	
効果：クリティカル-[LV]								
ソニックブリッツ	1	2	マイナー	15m	自身	-	-	
効果：射撃武器作成。1シーン持続。 攻撃力：[Lv+4]、攻撃時のドッジダイス-1								
陽炎の衣	2	3	マイナー	至近	自身	自動	-	
効果：隠密状態になれる。1シーンLv回。メインプロセス終了まで持続。								
風鳴の爪	1	2	メジャー	武器	-	対決	-	
効果：組み合わせた攻撃でDL後、[Lv]個のダイス目を振り直せる								
見えざる死神	3	2	メジャー	武器	-	対決	-	
効果：判定ダイス+1個、攻撃力+[Lv*3]。隠密状態の間のみ使用可。								
マシラのごとく	3	5	メジャー	-	単体	対決	80↑	
効果：攻撃力+[Lv*10]する。判定ダイス-5個。1シナ1回。								
デスストーカー	3	-	常時	至近	自身	自動	リミット	
効果：隠密状態で行う攻撃力+[Lv*4]。浸蝕率基本値+5								
軽功	★							
効果：身軽だよ								
無音の空間	★							
効果：気配を消せる								
うさぎの耳	★							
効果：色々聞こえるよ								
見放されし地	★							
効果：…隠れるのは、得意なので。								
効果：								
効果：								

「教官、報告書の作成が出来たんですけど……後の方が良いですか？」

「別に…無理してません。これくらいしないと…アイツには、届かないんです」

「……すみません、次はミスしないように、気を付けます」

「大丈夫？何か手伝うけど……」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

父が居て、母が居て、姉が居て。これといって目立つ事のある家庭ではないが。
少しだけ裕福な家庭で育っていった。
兎に角厳しい父と、厳しいけれども優しさがあった母。完璧で優秀な姉に、これといって取り得のない自分。
両親はそんな姉と常に自分を比較して来た。
どんなに頑張っても、両親は認めてくれない…けれど、姉だけは自分の頑張りを認めてくれていた。
自分を認めてくれる姉だけが、心の支えだった。
(両親も、極稀に頑張ったと認めてくれる事はあった。だが些細な程度あり殆どないに等しい感じ)

小さい頃から頑張り続けてきて…高校入学の時。
難関校と呼ばれている私立高校への入学を決めた。
その時、初めて両親が認めてくれた。褒めてくれた。
努力が報われたと、思った時だった。